川柳

少しだけゆずれば絆深くなる　竹本　タエ子

何事も反復の日々老夫婦　坪郷　英美子

値上りで又生活の締め直し　重宗　隆治

送迎に無情の雨降り止まず　山口　美智子

せせらぎも今は暗渠（あんきょ）で靴の音　今川　舞

俳句

鍬（くわ）ひと振りひと振りごとに土匂う　丸田　和子

初つばめ肩を怒らせやって来る　山村　さだ子

鉛筆の持ち方正し入学す　金内　憲一

葉桜や自転車磨く男の子　春吉　智子

口癖まで母に似て来し古茶新茶（こちゃしんちゃ）　林　保江

短歌

断捨利(だんしゃり)のねんねこ半纏(はんてん)着てみればあの頃の子の温もりがある　山口　正子

かつて母と一緒に書いた調査票明治の欄はもはやなくなり　戝間　由美子

葉桜の陰やわらかき駐車場(ちゅうしゃば)に茄子(なす)苗植え終え夫(つま)と一服(いっぷく)　江川　詳子

バス停で誰か待つ君まぶしくて私じゃないと泣く夢のなか　弘重　和恵

包丁に力入(い)らねば夫(つま)の声「手伝おうか」も手元危(あや)うし　河野　美津子

自由律俳句

月と別れてひとり交差点　佐川　智英実

丸いす三つの面会はずむ顔　松下　満江

幼子のよちよち歩きに拍手喝采　岡部　雅江

若葉風なえた心をなでていく　田中　久代

よけても避(よ)けても路(みち)の穴　岡村　裕司